和歌山県地球温暖化対策情報誌

わおん通信

2021 夏号 vol.41

特集 和歌山の自然について楽しく学ぶ

わかやま海洋サミット　2021年3月から2021年6月

CONTENTS

P2－P3
春を見つけた！
心に留まった「目標」を学ぶ
地域のつながりでつくる「環境の祭典」

P3 今年は「おもしろ ミライまつり2021」

P4－P5
和歌山の自然について楽しく学ぶ
わかやま海洋サミット
2021年３月から2021年６月

P6 県情報

P7 推進員さん訪問記㉟
なるほど　ザ・ワード

P8 INFORMATION

春を見つけた！

2021年3月6日
コラボ企画第3弾

[岩出図書館×わかやま生き物クラブ]

「われら!!生き物調査隊～岩出図書館周辺で春を探そう～」がテーマのこの協働イベントは、今回で3回目を迎えます。毎回人気があり、今回も申し込み開始後すぐに定員に達しました。

当日は虫かごや網、双眼鏡を手にした子供たちが保護者と集まり、説明を受けた後、県環境学習アドバイザーの土井浩さん、中川守さん、中村進さん、県動物愛護推進員の青木純一さんらと図書館周辺のフィールドに出掛けました。近くの池にはオオバンやヨシガモなどの水鳥、空にはトビが舞い、ノスリやオオタカも確認できました。生き物が大好きな子供たちはおおはしゃぎ。青木さんがニホントカゲを捕まえると歓声が上がりました。また、中村さんからセイヨウタンポポとカンサイタンポポの見分け方を教えてもらった子供は、道端のタンポポを熱心に観察し、判定しようと試行錯誤するなど、自分から進んで活動する姿が見られました。

観察を終えて図書館に戻った子供たちは、自分のお気に入りの植物や鳥、虫について、採集した実物と図鑑を見比べながら、自分の図鑑としてまとめました。最後に図書館周辺を描いた大きなマップに、写真と生物名の付せんを貼り付け、みんなで生き物マップを完成させました。リピーターとして参加した小学校高学年の子供は、「前よりたくさんの鳥を観察できて楽しかった。」と感想を話しました。この生き物マップと子供たちが作成した図鑑は、図書館入口で3月27日から4月29日まで掲示され、来館者に図書館周辺の豊かな自然を感じてもらえたと思います。

図書館の方と共に運営を行った県環境学習アドバイザーで、わかやま生き物クラブ代表の松本朱実さんは「子供たちは、大人が見つけられない珍しい昆虫を見つけることもあります。市民の皆さんと地域の身近な自然を調べ、記録することで関心を広めていきたい。」と話していました。観察会に同行した同図書館の湯葉美奈子次長は、子供たちに優しい眼差しを向けながら「岩出図書館ならではの特徴を生かした観察会を、これからも継続して開催し、自然に親しむ優しい心を持った子供たちの成長に協力したい。」と話していました。

地域資源を活用したこのような活動が県内各地で行われ、自然を大切にする市民の心の輪が広がることで、子供、大人に関係なく、環境保全への関心が高まればと大いに感じました。（県センター）

心に留まった「目標」を学ぶ

2021年5月13日
SDGs出前授業
みなべ町立南部中学校

[和歌山県センター]

2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」SDGsが、今年度から中学校の教科書に盛り込まれ、中学校でも学習するようになりました。南部中学校では、和歌山県地球温暖化防止活動推進センター事務局長の臼井さんを出前授業の講師として招き、体育館に集まった2学年51名にSDGsの授業が行われました。臼井さんからは、まず、SDGsが世界の複雑な課題を整理したものであること、また、SDGsの17のゴール(目標)には、それぞれ具体的なターゲットがあり、一人一人が当事者としてそれらのゴールやターゲットについて関心や理解を深めていくことが、目標達成につながることなどについて、わかりやすい説明がありました。次に、これから授業で学習する8つの目標について、具体的な学習のヒントが示されました。例えば、7つ目の目標

の「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」については、世界で消費されるエネルギーの全体量やエネルギーの作り方、また、このまま消費し続けて大丈夫なのか、最近どんなことが変わってきているのか等、目標を達成するために考えるべき視点を教わりました。

最後に「人間が豊かに暮らし続けるためには、自分も自然環境の一部であると考え、2030年の自分の姿を想像しながらできることを探してみると良い。」という話がありました。生徒たちは、メモを取りながらSDGsについて理解を深め、関心のある目標について、自分自身が今後どのように行動を変えていくべきなのかを考えていました。

地域のつながりでつくる「環境の祭典」

2021年6月12日
環境祭2021
粉河ふるさとセンター

［紀の川市地球温暖化対策協議会］

「NPO法人紀州粉河まちづくり塾」が毎年開催している「環境祭」。昨年は、新型コロナウイルスの影響で中止となりましたが、今年は粉河ふるさとセンター野外イベント広場に場所を変更して、開催することができました。梅雨の合間ということもあり、時折降る雨の中、地元を中心に約100名の方が参加しました。

リサイクル事業所の展示&活動紹介コーナーをはじめ、木製のピンを倒して点数を競い合うフィンランド生まれの「モルック」、バッテリーで駆動する自動車の展示&試乗コーナーなどの出展がありました。また、近畿大学生物理工学部とフルーツ普及活動の方とのコラボブースでは「フルーツすごろく」を楽しむ親子連れの姿もありました。ステージでは、地元のシンガーソングライターTONPEIさん、田頭宜和さんによるミニライブも行われました。「エコネットきのかわ」のブースでは、恒例の抽選会の他、気候変動のパネル展示や環境クイズが実施されました。「環境祭2021」の開催により、市民の環境対策への関心が深まった1日となりました。

（県センター）

今年は「おもしろミライまつり2021」

おもしろ環境まつり＆おもしろ科学まつり合同開催

イオンモール和歌山（南海和歌山大学駅前の商業施設内） 2021年11月13日／14日
おもしろ環境まつり実行委員会・おもしろ科学まつり実行委員会

「わかやまのミライが見える科学と環境の祭典」として、子供たちのための祭典を予定しています。

今年で5年目となる「おもしろ環境まつり」と、2000年から続く老舗の科学イベント「おもしろ科学まつり」が、今年初めて合同で開催されます。「おもしろ科学まつり」とは、全国の都道府県で行われている「青少年のための科学の祭典」の和歌山大会です。これまで、相互にイベントを盛り上げながら別日程で行ってきましたが、今年は、「おもしろミライまつり2021」として、「科学」「技術」「環境」を同時に体験し、深い学びのきっかけとなる総合サイエンスイベントとなる予定です。「おもしろミライまつり2021」の詳細については、わおん通信秋号で特集予定です。どうぞ、お楽しみに！

特集 和歌山の自然について楽しく学ぶ

わかやま海洋サミット 2021年３月～６月

和歌山の豊かな海についての体験などを通じて、環境問題について考え取り組むきっかけとなることを目指したイベント「わかやま海洋サミット」が実施されました。全４回にわたって行われたプロジェクトの内容と今後の流れについて特集します。

◆小学生が伝える「和歌山の現状」

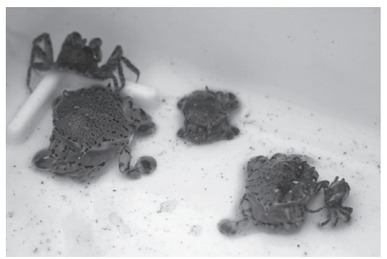
令和３年３月７日、プロジェクト第１回として和歌山市民図書館の屋上テラスにて、和歌山市内の小学生による環境学習発表会が開催されました。発表会には、雑賀小学校、松江小学校、和歌浦小学校、和歌山大学附属小学校の４校の児童とその保護者ら総勢154名が集結し、１年間のフィールドワークや調べ学習で学び、感じ、考えたことを、歌や紙芝居、時には劇や漫才も交えて発表しました。児童たちが考えた工夫が凝らされ、「環境問題を楽しく伝え、関心を持ってもらえる内容」となっていました。

この発表に向けて、東京大学の道田教授、大阪府立大学の千葉准教授、玉津島保存会の渋谷さん、森と水の源流館の尾上さん、和歌浦漁協の方々、県環境学習アドバイザーの平井さんら、多くの専門家によって学校で授業が進められました。児童達は、それぞれの立場で一生懸命活動している大人達の言葉を受け止めて、感じたことを発表しました。

発表の中で印象的だったのが、雑賀小学校６年生の言葉でした。「今までは私も海洋プラスチックごみに無関心でした。でも、この学習を通して真剣に考えるようになりました。たくさんの人と話をすることで多くのことを学び、この問題の深刻さを知ることになりました。時に、感謝の言葉をもらうこともあり、そんな時、私たちのやっていることは間違っていないと思えました。これからも一人でも多くの人に関心を持ってもらえるよう、ポスターなどで呼びかけていきます。」と力強いメッセージを伝えました。また、「こんなにごみがあったら、いくら掃除しても無理じゃないですか。」と、一緒に清掃していた児童から質問された渋谷さんは、「無理だと思ったら、本当に無理になってしまう。だから、そう思わないようにしているんだ。」と答え、児童の心を大きく動かしたようです。

◆目で見て触って、そして感じる

５月18日、和歌山マリーナシティ近くの橋（サンブリッジ）の下で、プロジェクト第２回がスタートしました。和歌山市にある浜の宮海水浴場近くの磯場で生き物観察会が実施され、42人の親子が集まりました。県環境学習アドバイザーの平井さんの進行で、磯の生き物の特徴や観察時の注意点の説明があり、



いよいよ海へ出発。「全員で合わせて12種類の生き物を見つける」という目標に向かい、バケツや網を手にした参加者は、大きな岩の影に目を凝らしたり、水中の石をひっくり返して探していきました。小さなヤドカリや黒くて大きなウミウシ、ゴカイの仲間ケヤリムシを見つけた子も。そして捕まえた生き物について、生態などの解説が行われました。

地元浜の宮の生まれであるNPO法人Blue Ocean for Children副理事長の桑田さんは、生き物の種類や個体数の減少など、海洋環境の大きな移り変わりの現状についても話していました。和歌山の海の現状を実感した参加者の一人は、「新たな心持ちとともに継続的に自然環境の保全活動に参加して行きたい。」と目を輝かせて話していました。

◆海の変化がもたらすもの

そしてプロジェクト第３回は、和歌山市にある和歌の浦干潟で実施されました。万葉歌にも詠われた名勝として知られている和歌の浦ですが、多様な生き物が生息しており、生態系の保全に重要な役割を果たしています。そんな和歌の浦が抱える大きな課題として「アサリの減少」があげられます。主な原因は、ツメタガイやナルトビエイによる食害によるものとされています。この対策として2015年度から地元の小学校や和歌浦漁業協同組合とともに進められてきたのが「あさり姫」プロジェクト。このプロジェクト名は、稚貝を竹筒の中に入れて干潟に沈めることで、竹筒がアサリを食害から保護していることから「かぐや姫」をイメージしてつけられたそうです。

この日、和歌の浦干潟に集まったのは、42人の親子。まず、環境アドバイザーの平井さんから、和歌の浦干潟の歴史やそこに生息する生き物をマンガやヒーローに例えた楽しい話があり、参加者は耳を傾けました。次に、和歌浦漁業協同組合の横田さんから、アサリがどのような原因で減ってしまっているか、についての話がありました。その後、干潟の観察を開始しました。干潮という絶好のタイミングであったため、広い範囲で採集が楽しめ、参加者のバケツを覗くと、二枚貝や巻き貝、大きな海藻やハクセンシオマネキなど、貴重な生き物の姿もありました。干潟の生き物を間近で見るのが初めての参加者は、年齢を問わず、とても興奮しているようでした。

◆人も生き物も「お掃除の日」

プロジェクト第４回は、あいにくの雨模様からスタートとなりました。片男波海水浴場で毎月１回ビーチクリーンを行っている「スマイルプロジェクト」の活動日に合わせてイベントが行われました。天候の影響もあり、普段よりビーチを訪れてる人が少なく、参加者が集まりにくいかと思われましたが、志を持ったレギュラーメンバーを含めて総勢30人が参加。地道な清掃活動を継続している方々の存在を、心強く感じました。普段より人影の少ない海岸を、参加した家族がトングやバケツを使ってペットボトルのキャップや吸い殻などを次々に拾っていきました。そして１時間後、大きなごみ袋６つ分のごみが集まりました。参加者はみな清々しい表情で解散しました。

海洋サミット参加者は、幻想的な「ウミホタル」観察の準備を進めながら、夕暮れを待ちます。ウミホタルは体調２～３mmほどのカイミジンコの仲間で、魚や他の海洋生物の死骸をエサとしているため「海のお掃除屋さん」と言われており、日中は砂の中に潜っていますが、日が落ちると餌を探すため海中を浮遊しているそうです。ペットボトルに直径５ミリほどの穴を開け、ちくわを入れたネットを中に仕込んだウミホタルの捕獲器を、海中に下ろして捕食の時を待ちます。そして辺りがすっかり暗くなったタイミングを見計らって、仕掛けておいた捕獲器を引き上げます。捕獲には向かない天候のため、ウミホタルを観察できない可能性も十分ありましたが、青白く光るウミホタルが手作りの捕獲器の中に入っており、その美しいウミホタルの輝きに歓喜するひとときとなりました。

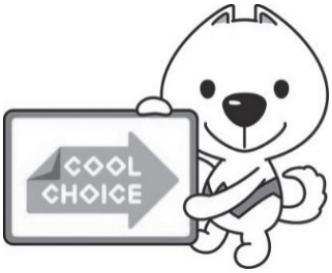
◆これからの活動

一見すると穏やかに見える自然環境も一歩踏み込むと、様々な課題に直面しています。和歌山の海洋環境もその一つです。「日本人の海に対する関心は、若年層が最も低い」という調査結果もありますが、海への関心を持たないと、海が抱える問題にも気づきません。海の豊かさを守っていくために求められていることは何でしょうか。わかやま海洋サミットで「きれいな海に戻したい」と子供たちが一生懸命活動しているその姿や、「一人の百歩より百人の一歩」という言葉に、私達大人の行動が試されています。

第５次和歌山環境基本計画を策定しました！
～ 2050年カーボンニュートラルを目指して～

1　和歌山県環境基本計画とは

『和歌山県環境基本計画』（令和３年３月策定）は、県の環境政策の基本的な考え方や長期的な目標、その実現に向けた取組の方向を示す計画です。
（計画期間：令和３年4月～令和８年3月）

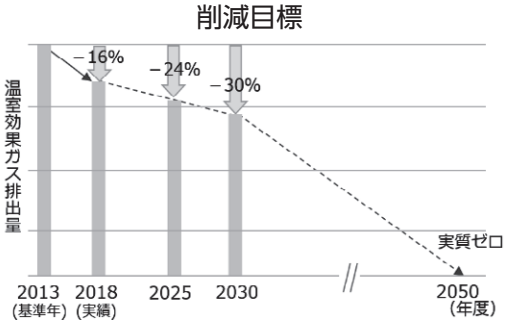


2　第５次和歌山県環境基本計画が目指す将来像

将来にわたり笑顔と活気と魅力あふれる和歌山
～地球環境、自然環境及び生活環境が適切に保全され、
豊かな環境がもたらす本県の魅力が地域の活性化につながっている持続可能な社会～

を目指すため、**「気候変動対策の推進」、「自然共生社会の推進」、「循環型社会の推進」、「安心・安全で快適な生活環境の保全」**の４つの基本的な取組を一体的に進めます。

3　第５次和歌山県環境基本計画のポイント



① **2050年カーボンニュートラルを目指します**

2050年度までに温室効果ガス排出量実質ゼロになることを目指し、省エネルギーの推進、再生エネルギーの導入促進、森林吸収源対策等、地域の脱炭素化を進めます。

② **気候変動への適応を進めます**

科学的知見を充実しながら、農業、自然災害、健康など分野別の適応策を推進します。

③ **自然林を守ります**

県土の77%を占める森林の約40%が自然林です。公有林化等により保護を図るとともに、環境影響評価制度等により貴重な自然環境への配慮を求めます。

④ **魅力ある自然を活かした地域の活性化を進めます**

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」や南紀熊野ジオパーク、自然公園など、自然環境が作り出す魅力を活かし、地域の活性化を進めます。

⑤ **海洋ごみ・プラスチック対策を進めます**

ごみ散乱防止条例などで、まちの美化活動を進めるとともに、マイバックの利用やリサイクルの推進等により、環境中へのプラスチックごみの排出をなくす取組を進めます。

第５次和歌山県環境基本計画は、和歌山県ホームページからダウンロードすることができます。
https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/032000/envplan/index.html

【訂正とお詫び】わおん通信春号（vol.40）p.６に和歌山県ごみの散乱防止に関する条例の施行日として「令和２年３月24日」とありましたが、正しくは「令和２年４月１日」です。謹んでお詫び申し上げます。

推進員さん ひょっこり訪問記㉟

那智勝浦町　赤岡　誠 さん

推進員16期生の赤岡さんは那智勝浦町生まれ。5人兄弟の長男として生まれ、中学ではバスケットボール部、高校に入ると陸上部のハードル選手として汗を流しました。また幼い頃から海や川を中心に、自然への強い関心を持ち、大学では水中の微生物研究に没頭する日々でした。

大学卒業後は、地元を離れて大手ゲーム会社に就職し、町のゲームセンターを「家族が一緒に楽しめる空間」にする企画開発に携わりました。企業で様々な人と関わった経験を活かし地元を活性化したいと考え、現在は、地元那智勝浦町の職員として働いています。農業農村振興に携わる中で、赤岡さんは、地域の様々な問題と直面しました。

地域の課題解決に奔走していた赤岡さんは、2017年衝撃的な出会いを果たします。東京で開催されている環境のイベントに参加した際に、17色のカラフルなブースに目が止まります。そこからは、SDGｓについて学びの日々を送り2019年に「カードを使ってSDGsを体験的に学べるゲーム」に参加。「これは地元の課題解決にきっと役立つ！」と考え、ゲームの講師（公認ファシリテーター）になりたいという想いを奥さんに伝えます。ゲームの講師になるには、研修時間と多額の費用が必要ですが、赤岡さんは「熱心に語る私の姿を見て、妻は笑って応援してくれました。」と当時の様子を振り返ります。こうして、赤岡さんは那智勝浦町を中心に数々のイベントを開催し、SDGsへの理解と参加者同士の対話の機会を重ねています。

赤岡さんは家庭でも様々な取組を行っており、例えば家庭菜園で育てたヘチマたわしの利用や、手作りコンポストの貸し出し、廃棄されてしまう「発芽有効期限切れ」のタネを取り寄せて、小松菜などを自宅で育てています。

生まれ育った自然豊かな那智勝浦町を、もっと素敵なまちにしたいと「ゼロカーボンシティ宣言」の計画づくりにも積極的に関わっている赤岡さんは、「いつだって大切なことは対話から始まります。お互いのつながりを知って共有する未来に対して、それぞれの立ち位置で楽しみながら役割を果たすこと。そうすれば持続可能な社会を作ることができると考えています。」と、やさしい口調と表情で熱き想いを語ってくれました。

なるほど ザ・ワード

STOP温暖化・焦点の言葉 ㊱

＊地球温暖化をめぐる報道などで、いま焦点となっている言葉を簡単に解説します

「2050脱炭素」

2020年10月、菅総理から「日本も2050年までに脱炭素社会を実現する。」という宣言が世界に向けて発信されました。欧米の動きより数年は遅れましたが、それでも世界中から歓迎されました。実現できれば、「石炭大国」と世界からバッシングされていた状態からの汚名返上となりますし、日本の高い技術力への期待、ジャパンマネーの投入が世界的なエコビジネスの活性化に効果があると期待されています。世界のエコビジネスは急成長しており、グローバル企業の多くが環境分野に参入し、投資を始めています。連鎖的に、これまでのビジネスにおいてもエコでない企業が市場から締め出され始めてもいます。日本や和歌山の企業さんだって他人事では済まなくなってきています。何か新しいことが起こる際には当然のようにお金が動き、そこには大きなビジネスチャンスがあるのです。中国では、国をあげて国内の脱炭素化を進めていますが、その背景には急成長しているエコビジネスを有利に進める意図があるとみられています。

ところで、ゼロ・カーボンやカーボン・ニュートラルなどとも表現される「脱炭素」ですが、人間活動から排出されるCO_2と、自然の森林や農地などの緑地や海洋が吸収するCO_2の差をゼロ（またはマイナス）にするという意味です。実質的 CO_2排出量ゼロなどとも表現されます。大気中へのCO_2の排出をゼロにするという意味ではありません。脱炭素を目指すにためは、方法は大きく３つのことをしなければなりません。１つ目は、これまで「今の」地球生態系が吸収した CO_2ではない化石資源などの燃焼（エネルギー利用、焼却熱源など）を何か別のもの、例えば再生可能エネルギーに置き換えることや、燃焼などでできてしまった CO_2を回収したり再利用するなどして大気中に放出させない方法です。２つ目は、省エネ省資源を徹底するなどして、CO_2の元になる資源利用を減らすことです。３つ目は、すでに大気中に排出されてしまっている CO_2の濃度を産業革命前のレベルに戻すために、CO_2吸収源を拡大することです。自然保護、植林や有機農業の推進などが有力な方法になります。

具体的な対策には様々なものがありますが、私たちに直接関係する日常的なこととして内容を知っておきたいキーワードは、オーガニック、４パーミル・イニシアティブ、グリーンリカバリー、エシカル、エコマーク、辺りのワードではなかろうかと思います。インターネットなどで調べてみてくださると良いかと思います。

さらに詳しく知りたい方は　県センター WEB サイト
（https://wenet.info/）へ

イベント情報

おもしろミライまつり［おもしろ環境まつり＆おもしろ科学まつりが１つの会場で開催されます］

2021年11月13日（土）／14日（日）11：00〜17：00【今年は２日間開催】
場所：イオンモール和歌山［和歌山市］
詳細は　おもしろ科学まつりWEBサイト　https://kagaku-wakayama.com/omoshiro2021/

【オンライン】第18期　和歌山県地球温暖化防止活動推進員養成講座

SDGsカードゲームで気候変動とつながりのある目標について体験を通じて学べる機会です。
ゲーム内容は「2030版」と「地方創生版」の２種類があります。会場ごとにそれぞれ違います。
詳しくは県センターまで

第４回・田辺市会場 ７月31日（土）13：30 〜 16：45　会場：田辺市民総合センター４階
第５回・橋本市会場 ８月８日（日）13：30 〜 16：45　会場：産業文化会館アザレア２階
第６回・日高町会場 ８月28日（土）13：30 〜 16：45　会場：日高町公民館

YouTube情報番組　公開中！「和くらす〜持続可能な暮らしのヒント〜」

◆和歌山県内を中心に地域の
「持続可能な暮らし」
のヒントを動画で紹介

チャンネル和くらすへの
アクセスはこちら

「持ち帰り包装に気を配っているイチオシのお店を紹介したい」
「地元のお祭に参加します・子供向けのイベント開催します」
「気の合う仲間と一緒に海辺でビーチクリーンしています」
「火を使わずに美味しく食べられるお気に入りの時短レシピ教えます」
「自宅でエネルギーをまかなえる装置を開発している人を知っています」
などなど、和歌山の良いところを全国に向けて発信していくチャンネルです

あなたの活動をサポート　わかやま推進員サイト　わかやま 推進員　検索　イベント情報も随時更新

県センター通信

上半期を終え、2021年も気候変動による影響と考えられる事象が全国各地で起こっています。今後も、予想を超える事象が起こる可能性があります。このことについて、私達はどう捉えて、どのような活動を進めていくべきなのかを、本格的に考える必要性を感じます。

私達は、県内各地で、たくましく環境保全活動を行う人々をどんどん追いかけていきます。前号で紹介した小麦生産プロジェクトを展開するママさんたちの奮闘ぶりを追取材しました。５月25日、集まった約20人が朝から収穫の真っ最中でした。一面に輝く金色の麦穂をコンバインで刈り取っていきます。そして移動式の脱穀機に穂が吸い込まれ、収穫袋がみるみる膨らんでいきます。交代で手際よく懸命に作業をしていくママさんたちの姿から、自分たちの手で育てた小麦が学校給食のパンとして子供たちに届いてほしいという想いが、ひしひしと伝わってきます。活動グループの方々によると、初めて開墾から収穫まで全て行い、出来上がった小麦はなんと300kgとのこと。想いが一杯に詰まった小麦で作られたパンは、一体どんな味がするのでしょうか。

2021 夏号 vol.41

わおん通信

発行／和歌山県環境生活総務課
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1
TEL：073-441-2674　FAX：073-433-3590
mail：e0317001@pref.wakayama.lg.jp

編集・お問い合わせ／和歌山県地球温暖化防止活動推進センター
〒641-0014 和歌山市毛見996-2
TEL：073-499-4734　FAX：073-499-4735
mail：wenet@vaw.ne.jp

PRINTED WITH SOY INK